

教育資料室だより

No.9 令和3(2021).9.1

発行 桐生市立教育資料室

桐生市小曾根町1-9 電話・FAX (43)3171

あの頃 この街 桐生八木節まつり

市制施行100周年※1特集3回目は、「桐生八木節まつり」を取り上げました。今年はCOVID-19感染予防のため、神事を中心とした大幅な縮小開催となりましたが、せめて昭和の時代の写真だけでもお楽しみください。

祭りの起源は、桐生新町三丁目の衆生院(現在の本町三丁目の市営住宅の辺りにありました)の境内にあった牛頭天王社の祭りとされます。明暦2年(1656)に祭礼の記録※2がみられるため、この年が桐生祇園祭りの起源とされています。

祇園祭りは、祇園会とか天王祭礼と云い、元来は牛頭天王(祇園精舎[=釈迦が説法を行った僧院]の守護神で、疫病を差配する力を持つとされる)を祀るものでした。京の祇園社で神仏習合(薬師如来の垂迹であり素戔嗚命の本地とされます)の厄除神として古来から祀られていたことから全国に広まったといわれています。

祭りが始まった当初は、子供の手踊り※3を主とした素朴なものでしたが、桐生新町が織物を中心産業とした北関東有数の商業都市として活気もち始める頃から、徐々に華やかで賑やかなものになっていったようです。華やかな祭りは、幕府や藩の意向により、時には禁止されもしましたが、町衆の粘り強い努力によって伝統は途絶えることなく引き継がれていきます。明治を迎える頃には、屋台の曳き違いなどが行われ、狂言芝居や飾り屋台など一丁目から六丁目までの各町が競い合い、大勢の人出があったといえます。

「桐生まつり」は、昭和39年に春の商工祭、夏の祇園祭・七夕祭・花火大会、秋の桐生祭、その他地域の祭礼などをまとめた祭りとして第1回が開催されます。その後、昭和63年に「桐生八木節まつり」と改称され現在にいたっています。

★この文章は、桐生市HP「桐生八木節祭り」を引用し、補足、改編して作成しました。

☆参照「ふるさと桐生のあゆみ」(桐生市教育委員会刊)
「桐生新町の時代」(巻島 隆 著)

※1 大正10年(1921)3月1日市制施行

※2 後年の由緒書をもととする

※3 詳細は不明だが、数え10歳~15歳くらいの子供が豊作祈願等を祈って舞い踊ったようである



市制60周年(1981)



夏祭りの宿命でしょうか。何故か毎年のように突然の雨に見舞われます。↑
 だからこそ撮れた幻想的な大櫓。昭和57年(1982)の新川球場[後日紹介します]の風景です。
 ↓ 翌58年に国民体育大会開催県となるため、「あかぎ国体」PRのみこしが見えます。

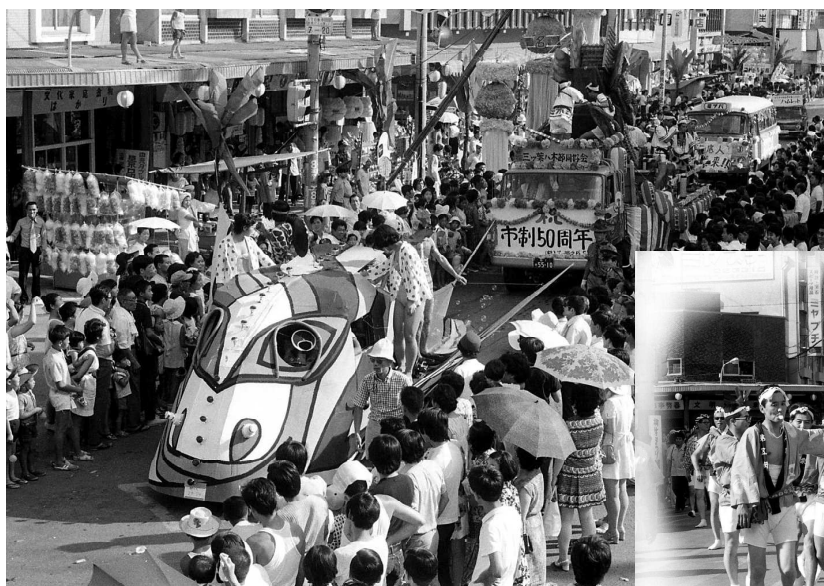


←恒例となっている阿波踊りとの交流(1973撮影) ↓



祭りといえば
八木節踊り
と
七夕飾り

それにしても、気になるのは、左上に写るスーパーカー[ランボルギーニカウンタック?]{です。拡大すると確かにお飾りのパネルで、よく見ると他にも何枚かあります、何故ここに?位置的に推測して人形と玩具の「やまねや」さんのものかと思い、勤めていらした方に尋ねてみましたが、記憶にないとのことでした。またしても謎が。↓



上の写真3枚は昭和40年代のものと思われるが、スーパーカーブームは確か50年代前半だったような...

市制50周年
昭和46年(1971)



もっと古い時代の写真もありました。拡幅前の本町通りです。二人乗りの少年発見。おおらかだったのですね。



2 ページに載せた新川球場の大櫓は、こんな様子でした。↓

